

神奈川県発掘調査成果発表会 2016

◆ 日 時

平成28年7月30日(土) 13:00 ~ 16:30 (開場 12:30 ~)

◆ 口頭発表

13:05 ~ 13:40	「西富岡・長竹遺跡 第2次調査」(伊勢原市) 麻生 順司(株式会社 玉川文化財研究所)	——	1
13:40 ~ 14:10	「南俣宿遺跡 VIII地点」(大磯町) 渡辺 務(株式会社アーク・フィールドワークシステム)	——	3
14:10 ~ 14:40	「下大曲一丁目遺跡」(寒川町) 吉岡 秀範(株式会社アーク・フィールドワークシステム)	——	5
14:40 ~ 15:00	休憩(20分)		
15:00 ~ 15:35	「上粕屋・和田内遺跡 第5次調査」(伊勢原市) 園村 維敏(株式会社 パスコ)	——	7
15:35 ~ 15:55	「船久保遺跡 第2次調査」(横須賀市) 石川 真紀(株式会社 玉川文化財研究所)	——	9
15:55 ~ 16:10	「日向・東新田原遺跡」(伊勢原市) 横山 太郎(有限会社 吾妻考古学研究所)	——	11

◆ 紙上発表

	「独園寺やぐら群 第3次調査」(横須賀市) 河合 英夫(株式会社 玉川文化財研究所)	——	13
	「用田大河内遺跡」(藤沢市) 吉田 浩明(株式会社 玉川文化財研究所)	——	15
	「上粕屋・鳥居崎遺跡 第3次調査」(伊勢原市) 北平 朗久(株式会社 玉川文化財研究所)	——	17
	「煤ヶ谷古在家遺跡 第2次地点」(清川村) 香川 達郎(株式会社 玉川文化財研究所)	——	19

会 場：かながわ県民センター2階ホール

主 催：神奈川県教育委員会 教育局 生涯学習部 文化遺産課
中村町駐在事務所(神奈川県埋蔵文化財センター)

旧石器時代の細石刃石器群と槍先形尖頭器が重複して出土

にしとみおか ながたけ

西富岡・長竹遺跡 第2次調査

所在地 伊勢原市西富岡 981-13 他

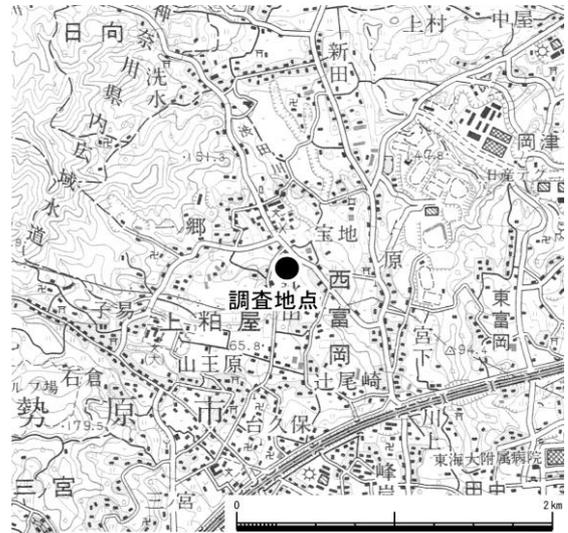
調査期間 平成26年8月25日～27年8月21日

調査面積 2,534 m²

調査組織 株式会社 玉川文化財研究所

担当者 麻生順司・御代七重

調査概要 本遺跡は小田急小田原線伊勢原駅の北西約3kmに位置します。地勢的には丹沢山塊の東端に位置する大山の東麓にあたり、上粕屋扇状地を東西に縦断する渋田川支流の左岸に立地します。本遺跡の調査については、昨年度の発表で縄文時代までの成果を述べていることから、今回は旧石器時代の調査内容について報告します。



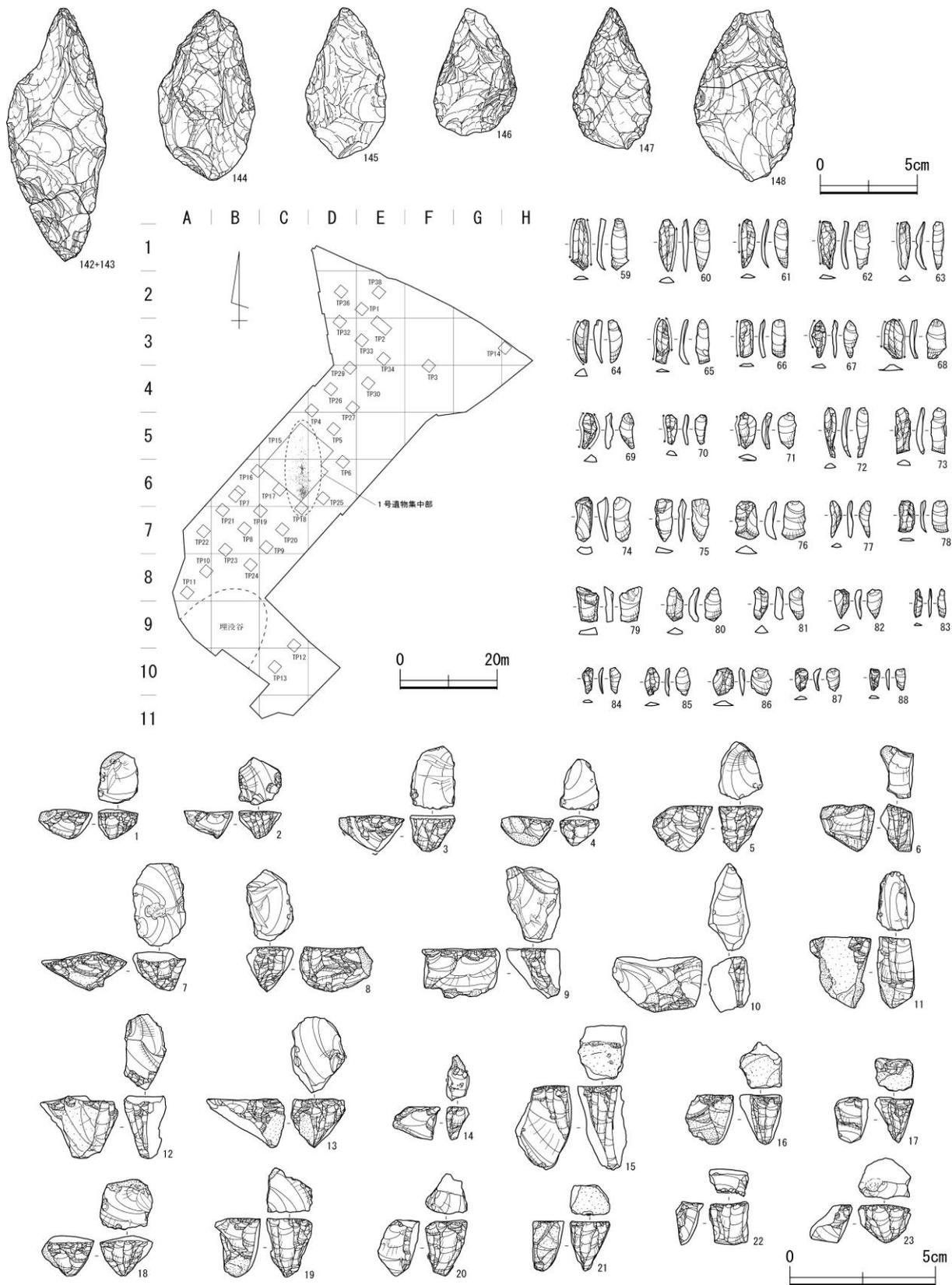
第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

旧石器時代 旧石器時代の調査では、B0層からL1H層にかけて合計1,700点を超える遺物が出土したことから、この面的なピークを生活面と考えてL1H層上部を文化層としました。このL1H層上部文化層からはTP15とTP18を中心にまとまった遺物群が検出されましたが、今回の調査は部分的な拡張調査であったことから、これらの遺物群を1号遺物集中部として報告します。L1H層上部文化層から検出された石器群の最も大きな特徴としては、細石刃石器群と槍先形尖頭器石器群が同一遺物集中部から重複した状態で検出されたことが最も大きな点としてあげられます。

細石刃石器群は、細石刃石核の打面が平坦な原礫面か1枚の剥離（折断）面であり、打面調整が施されないという大きな特徴が認められます。このような技術的特徴は「代官山技法」あるいは「代官山型細石刃技法」（砂田 1986）と呼ばれており、細石刃石器群の中でも最古級に位置づけられるものと考えられている石器群です。

一方、槍先形尖頭器については、平面形は最大幅を胴中央部にもつ木葉形（第2図 142+143）と、最大幅を胴下半部にもつ木葉形を呈するもの（第2図 144～148）の二種類が認められます。石材としては安山岩とホルンフェルスを特徴的に用い、同一母岩と考えられる剥片類や接合資料の存在から、この場所で尖頭器製作を行っていることが分かりました。その他の定形石器としては、スクレイパー・クサビ形石器・礫器・台石が検出され、両刃の礫器の存在とともに台石については次期調査のために保存した大形礫の存在が注目されます。

まとめ 以上のように西富岡・長竹遺跡 L1H 層上部文化層の石器群は細石刃石器群と槍先形尖頭器石器群の出土が最も大きな特徴としてまとめられます。また、今回の調査では、L1H 層の下部よりナイフ形石器の出土も認められ、試掘調査では B1 層からの石器が確認されている点も注目されます。（麻生順司）



第2図 旧石器時代出土石器

南仮宿遺跡 VIII地点

所在地 中郡大磯町国府本郷 207-1

調査期間 平成 27 年 8 月 18 日～11 月 24 日

調査面積 929.2 m²

調査組織 (株)アーク・フィールドワークシステム

担当者 渡辺 務・柳川清彦

調査概要 調査は、大磯警察署新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施しました。南仮宿遺跡の調査は今回で 8 回目となり、中世、奈良・平安時代、古墳時代前・後期、弥生時代後期の各種遺構が見つかり遺物が出土しました。

中世 竪穴建物跡、土坑などが発見されました。中世と判断された遺構は主軸方向がほぼ南北を示す特徴が認められ、遺構の性格は貯蔵目的で設けられた可能性が推定されます。

奈良・平安時代 竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑などが発見されています。H 8 号掘立柱建物跡は東側に庇を持つ身舎が桁行 5 間 (10.5m)、梁行 3 間 (6.3m) で庇を含むと桁行は 6 間 (12.9m) の東西棟で、柱間寸法は 1.8～2.4m の側柱式建物です。掘り方は北西隅柱を除き布掘りでした。H 8 号掘立柱建物跡の西端梁行に東側桁行の柱筋を合わせる H 6 号掘立柱建物跡は桁行 4 間 (7.2m)、梁行 2 間 (3.8m) の南北棟で、柱間寸法は 1.6～2.0m の坪掘りの側柱式建物でした。この 2 棟は出土遺物から奈良時代前半頃の所産と考えられ、共存していた可能性が高いものと思われます。竪穴建物跡は平安時代の所産と考えられます。

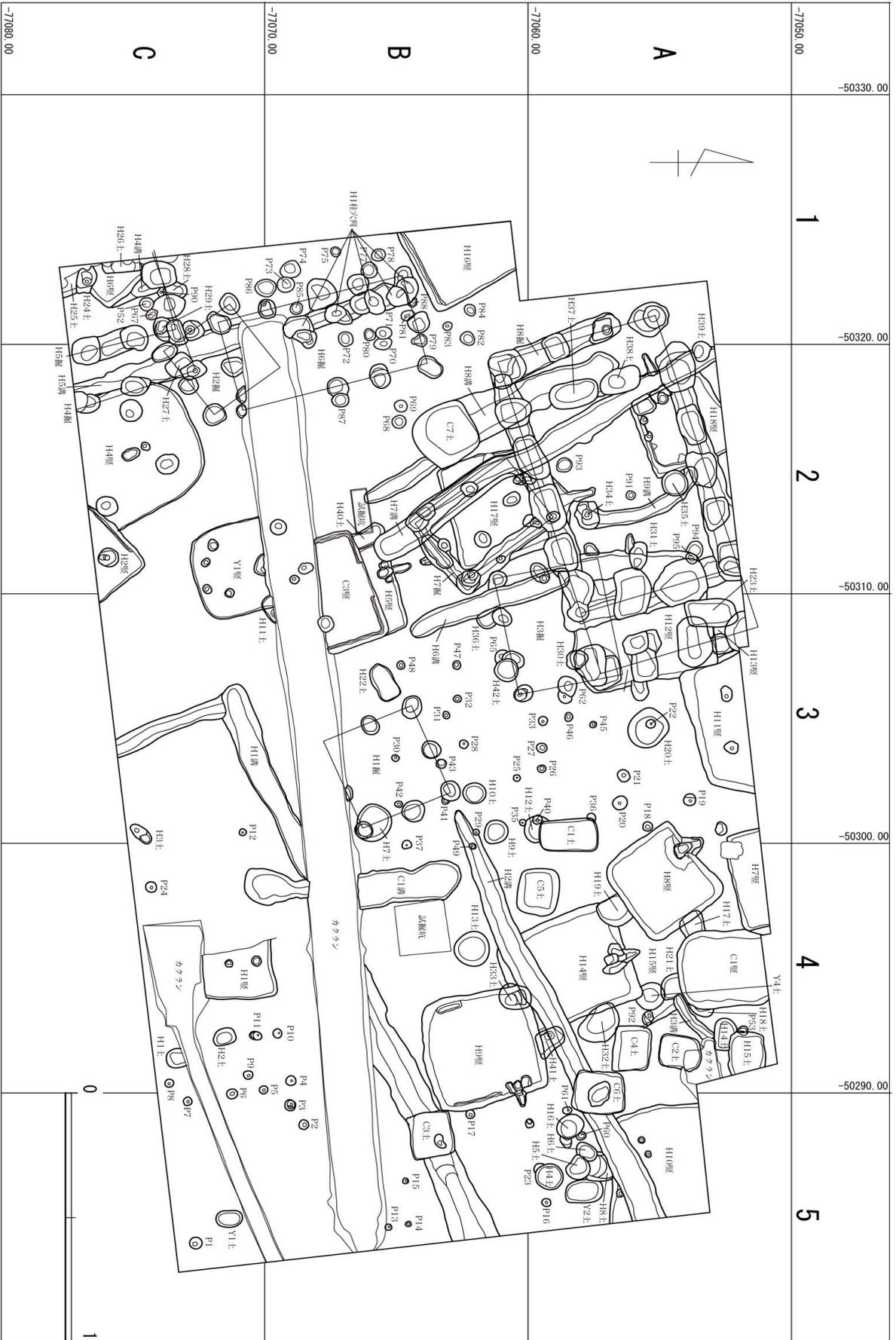
古墳時代 竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑などが発見され、竪穴建物跡だけで 17 棟と今回の調査で見つかった 20 棟の竪穴建物跡の大半を占め、調査の主体となる時代でした。後期の竪穴建物跡のカマドの中には煙道がトンネル状に掘られる例も複数認められました。

弥生時代 後期の竪穴建物跡、土坑などが発見されましたが、竪穴建物跡は 1 棟のみで遺物の出土も少なく、集落の中心からは外れている可能性が考えられます。

まとめ 調査で注目される遺構は、奈良時代前半頃と推定した H 8 号掘立柱建物跡が挙げられます。建物は庇を持つ大型のもので、H 6 号掘立柱建物跡と共に L 字状に配されていたものと推定されます。本跡の北側には余綾郡衙の推定地として知られる馬場台遺跡が隣接していることや、同時期の竪穴建物跡が見られず、掘立柱建物跡のみが見つかったなどの特徴が挙げられます。建物の性格を推定するには周辺遺跡を含め今後の調査の進展を待たなければならないと思いますが、遺跡の立地が不動川、葛川の両河川に挟まれ相模湾を望み、近くを旧東海道が通っているなど水上、陸上交通路の結節点に位置していることが重要な要素になるのではないのでしょうか。(渡辺 務)



第 1 図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 遺跡全体図 1/250

古代～中世の集落址の調査

しもおおまがりいっちょうばた

下大曲一丁目畑遺跡

所在地 高座郡寒川町大曲二丁目地先
調査期間 平成28年1月7日～6月6日
調査面積 455 m²
調査組織 (株)アーク・フィールドワークシステム
担当者 吉岡秀範・高杉博章

調査概要 一級河川小出川河川改修工事に伴う調査で、遺跡は寒川町の南端で、寒川町と茅ヶ崎市の行政境付近を流れる小出川の右岸に所在します。確認した遺構は、古代・中世・近世以降のもので、出土遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、青・白磁、陶磁器、木・石製品等でした。

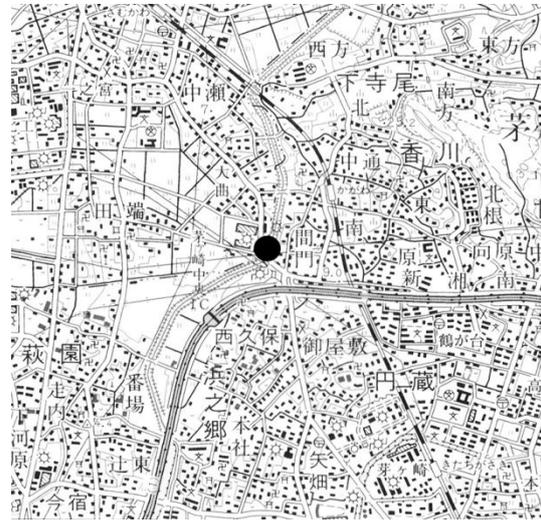
近世以降 土坑1基、畝状遺構4か所、段切1か

所を確認しました。これらの覆土には、宝永火山灰が含まれていることから降灰以降のものと考えられます。土坑は平面形が長方形で、底面から板状の木製品が出土しました。段切状遺構(KSX01)は調査区南端で認められ、東・南側は河川により削平されていました。

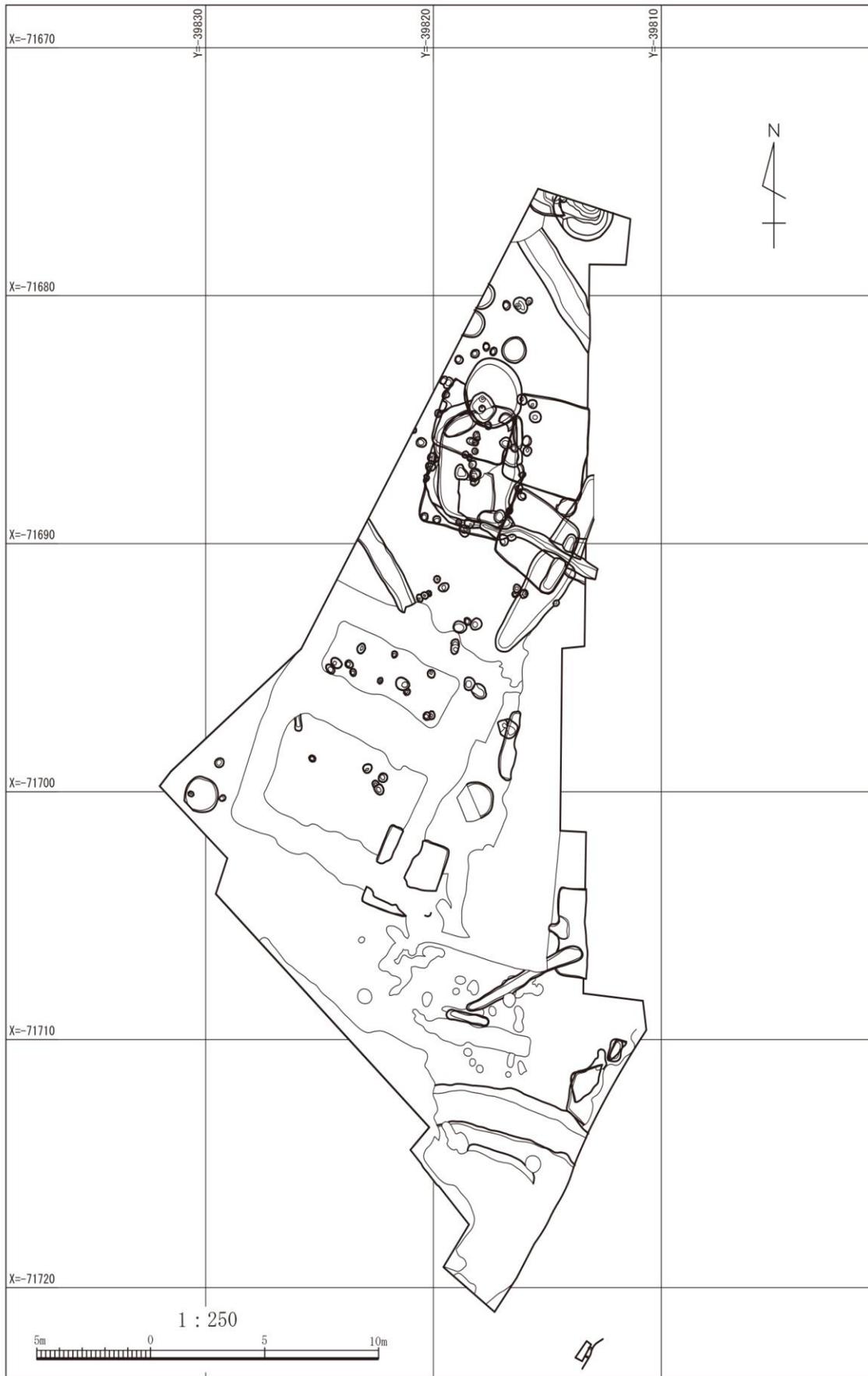
中世 竪穴状遺構5基、土坑18基、溝状遺構6条、井戸1本、ピット67基を確認しました。竪穴状遺構と土坑の多くは、調査区北側で複雑に重複して認められました。竪穴状遺構は長方形で、その周囲ではピットが多く認められ、それに付属する柱穴とも考えられますが判断は難しい状況でした。

古代 竪穴住居跡5軒、土坑6基、性格不明遺構2基、ピット14基を確認しました。竪穴住居跡(HSI05)は東側が河川により削平されていますが、土師器坏・小形甕等の遺物が出土しました。カマドは北壁中央付近に作られ、支脚に小形甕を倒立させて使用していました。左袖付近からは焼けた切りロームが出土したことから、カマドの構築材として使用されたものと考えます。性格不明遺構(HSX02)は、竪穴住居跡等が確認された面から約2m低い現在の河川際の氾濫原で認められたもので、現状では土師器甕の口縁部が露出し、東側の一部は河川の流れによって削平されました。詳細を確認したところ、U字状の掘り込みから土師器小形甕が3点入れ子状に重なって確認されました。

まとめ 今回の調査範囲は、河川際ではありましたが多くの遺構が確認されました。現在の河川氾濫原の段差際、または現在の河川流路際で竪穴住居跡等の遺構が確認されていることから、古代から中世の段階では南東方向に半島状の微高地が広がっていたものと推測されます。今回確認された遺構の時期は、中世が出土遺物から13～14世紀頃、古代が9～10世紀頃と考えられます。(吉岡秀範)



第1図 遺跡位置図(1/50,000)



第2図 下大曲一丁目遺跡遺構配置図(1/250)

丘陵上に営まれた奈良時代の集落址を発見

かみかすや わだうち
上粕屋・和田内遺跡第5次調査

所在地 伊勢原市上粕屋地内
調査期間 平成27年8月28日～28年2月17日
調査面積 1,621.78㎡
調査組織 株式会社 パスコ
担当者 園村維敏 竹内順一
調査概要 遺跡は丹沢山塊の東端に鎮座する霊峰大山の東側で、上粕屋扇状地を東西に縦断する洪田川の支流に開析された台地上に位置しています。縄文時代から近世以降にまで亘る時代の遺構と遺物が出土しました。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

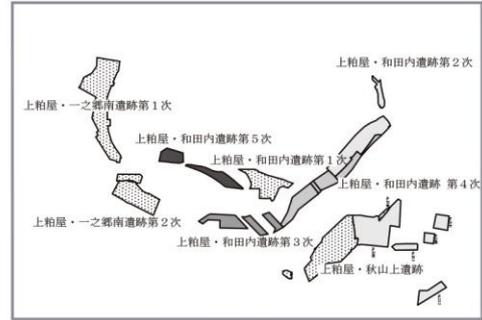
近世以降 建物跡1基、土坑23基、溝2条、畝状遺構1か所を調査しました。これらの遺構は

農耕のための施設と考えられますが、出土遺物は陶磁器や泥面子が出土しています。

古代 竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡5棟、柵列3条、溝状遺構4条、土坑6基、ピット13基を調査しました。出土遺物から8世紀の初め頃に営まれた集落で、直線状に開析された溝や斜面地に建てられた竪穴住居跡と掘立柱建物跡などがあり、計画的に営まれた集落と考えられます。住居跡の中には、よく使われているカマドなのに、使われていたはずの甕などの土器は出土せず、置き忘れたような土器が出土する奇妙な状況の住居跡がありました。いわゆる廃棄儀礼として捉えられ、当時の信仰の在り方を示すものとみられます。出土遺物は少なく、東海地方で生産された須恵器や在地産の土師器、甕などの日用品の他、ガラス製小玉が1点出土しました。

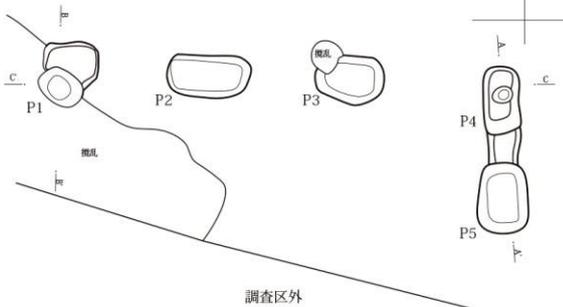
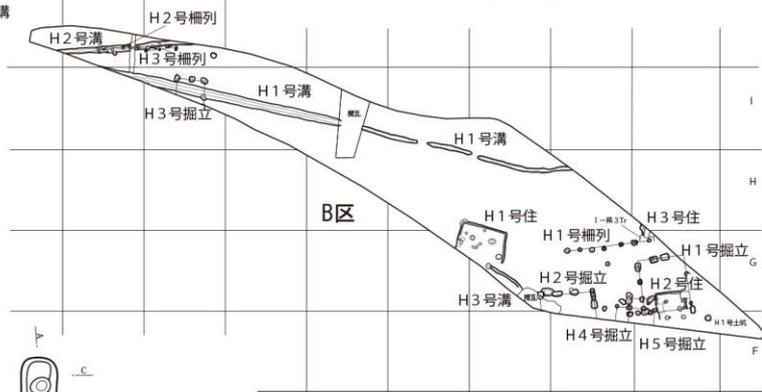
縄文 縄文時代の土坑6基、集石4基を調査しました。遺物が少なく時期ははっきりしません。出土した縄文土器は草創期から後期までの長期間にわたるものですが、摩耗して文様がはっきりしているものは少なく、全体の形がわかるものもありません。この中で草創期の土器が2点出土しています。その他には石器（石匙、磨製と打製石斧、石皿）、石製品（石棒）があります。

まとめ 縄文時代の土器の中には草創期の土器が僅かですが混ざっており、隣接する上粕屋・和田内第1地点では旧石器時代の遺構と遺物が見つかることから、周辺は早くから狩場として機能していたことが窺えます。古代では8世紀初め頃を中心とした時期に限定される竪穴住居跡や掘立柱建物跡、直線状の溝、柵列などの遺構から、古墳時代には未開発であった丘陵や大山山麓地域の開発を目指したものとみられます。このことは積極的に斜面を利用している様子からも窺えます。掘立柱建物跡の柱穴の底が階段状になっていたり、竪穴住居跡の片側が消失しているのは、斜面に建てられていたことによると考えられます。この様相は当遺跡だけでなく西相模の丘陵地帯にも散見され、奈良時代の初めの丘陵開発の在り方を示しているものとみられます。（園村維敏）

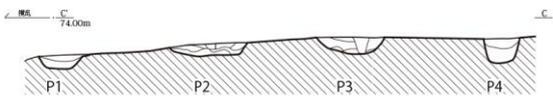


上粕屋・和田内遺跡第5次古代遺構配置図

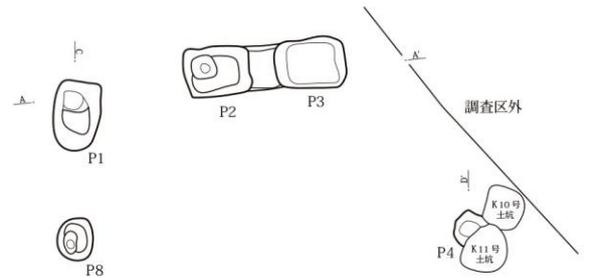
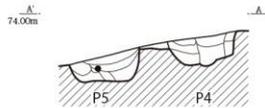
0 20m



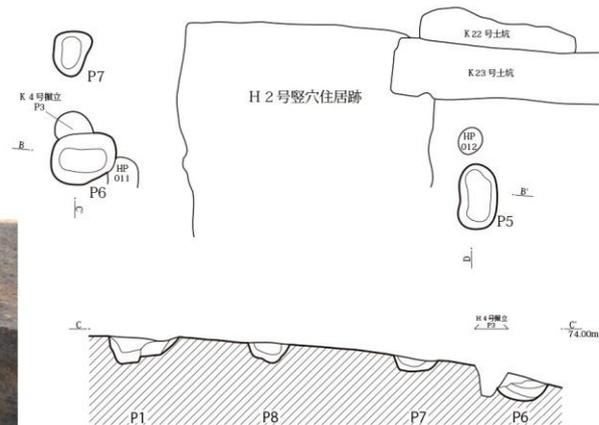
調査区外



H2号掘立柱建物



調査区外



H1号掘立柱建物

0 [1/60] 2m



H6号住居カマド断面写真

第2図 周辺の調査遺跡、H1号・H2号掘立柱建物、H6号住居カマド断面写真

三浦半島で旧石器時代の石器が層位的に出土

ふなくぼ

船久保遺跡第2次調査

所在地 横須賀市林5丁目 2473 他

調査期間 平成26年8月28日～27年7月14日

調査面積 約7,804 m²

調査組織 株式会社 玉川文化財研究所

担当者 石川真紀・前川昭彦

調査概要 船久保遺跡は、三浦半島中央部の西海岸域にあり、三浦市との市境に近い横須賀市南西部に位置しています。遺跡は標高30～40mの起伏に富んだ丘陵上に立地し、眼下には小田和湾が見渡せます。昨年度は縄文時代までの成果を紙上発表していますので、今回は旧石器時代の調査について報告します。

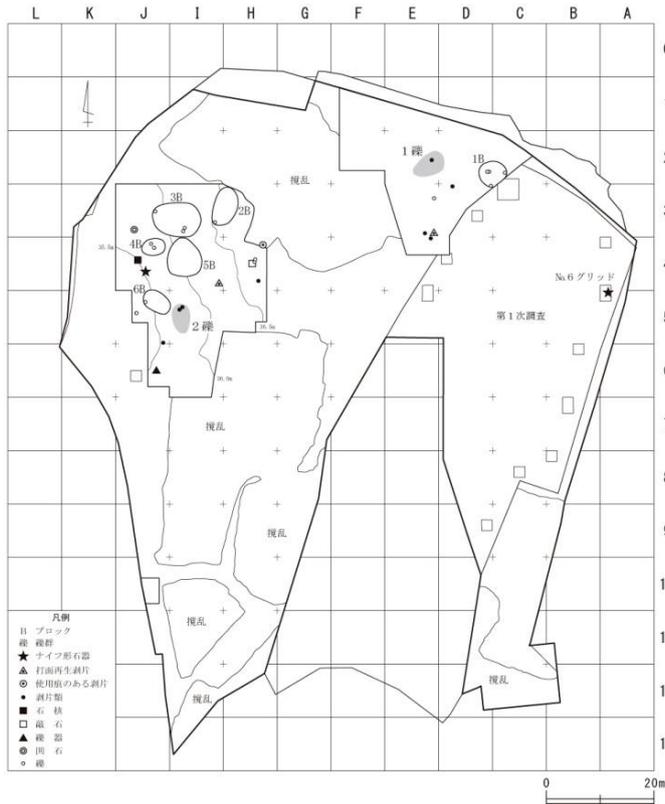


第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

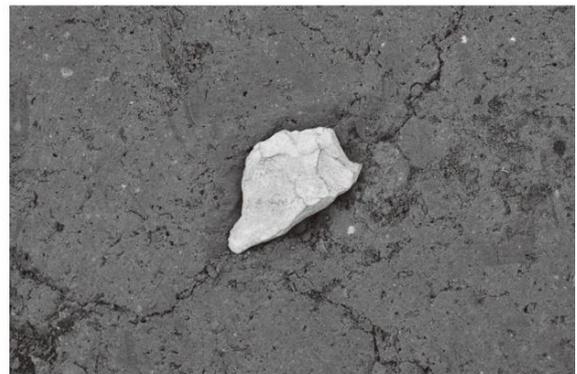
船久保遺跡の旧石器時代の調査は、第1次調査でローム層の試掘調査が行われ、相模野 B2 相当層からナイフ形石器、L5 相当層から敲打痕をもつ石核が出土したほか、B3L 相当層を掘り込み面とする土坑が1基検出されました。今回の第2次調査では、第1次調査区の西側および南東側の隣接地を相模野 B1～B3 相当層まで調査しました。

旧石器時代 今回の調査では、石器299点と礫86点の合計385点の遺物が出土し、これらの遺物は出土層位や石器群の内容から、合計4枚の文化層として捉えることができました。さらに下層の相模野 B4 相当層では、面的な調査は行っていませんが、台形様石器が2点出土しています。なお、調査区東側の埋没谷の西側縁辺では、どの時期に属するかは不明ですが、土坑状の土壤変質部が8ヶ所で確認されています。第Ⅰ文化層とした相模野 B1 相当層からは、調査区の西側で礫群が1基発見され、定形石器としてナイフ形石器が単独出土しました。第Ⅱ文化層とした相模野 B2 相当層からは、石器ブロック6ヶ所と礫群2基が発見され、今回の調査で最も充実した内容をもっています。石器群の特徴としては、切出状を呈する小形のナイフ形石器を主体に円形搔器や凹石などが出土しています。また、搬入品と考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが伴う点も注目されます。第Ⅲ文化層とした相模野 L3 相当層からは、石器ブロック4ヶ所と炭化物集中部1ヶ所が発見されました。石器群は黒曜石を素材とし、定形石器はナイフ形石器が3点出土しています。炭化物集中部は2つの石器ブロックに挟まれた状態で確認され、石器ブロックとの関連が推測されます。第Ⅳ文化層とした B3 相当層からは、調査区北側で石器ブロック1ヶ所が発見され、珪質頁岩製の石器と頁岩製の接合資料、玄武岩製の敲石が出土しています。

まとめ 今回の調査では相模野 B3 相当層までの調査により合計4枚の文化層が確認され、それぞれの時期を示す特徴的な石器群が検出されました。また未調査ではありますが、埋没谷に沿って発見された土坑状の土壤変質部の存在や下層からの台形様石器の出土が注目されます。(石川真紀)

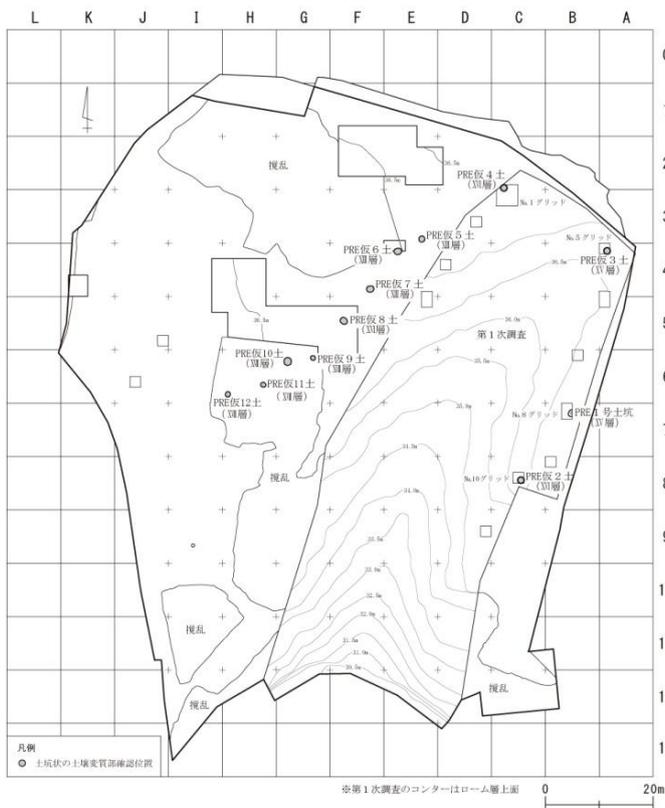


3～5号ブロック



ナイフ形石器出土状態

第2図 第Ⅱ文化層遺構分布図(1/1,500)



土坑状の土壌変質部検出状態



土壌変質部のアップ

第3図 土坑状の土壌変質部分布図(1/1,500)

古墳時代後期の円墳2基の調査

ひなた・ひがしんでんばら

日向・東新田原遺跡

所在地 伊勢原市日向171番1他5筆

調査期間 平成27年10月13日～11月16日

平成28年3月8日～3月18日

調査面積 179.8㎡

調査組織 有限会社 吾妻考古学研究所

担当者 横山太郎・有馬多恵子

調査概要 日向・東新田原遺跡は伊勢原市の北端、厚木市との市境に近い日向地区にあり、東西約1km、南北約400mに及ぶ伊勢原市No.15の北東側に位置しています。古墳と思われる高まり2箇所が存在することと、周辺の試掘調査において周溝状の溝が検出されたことから本格調査が実施されることとなりました。

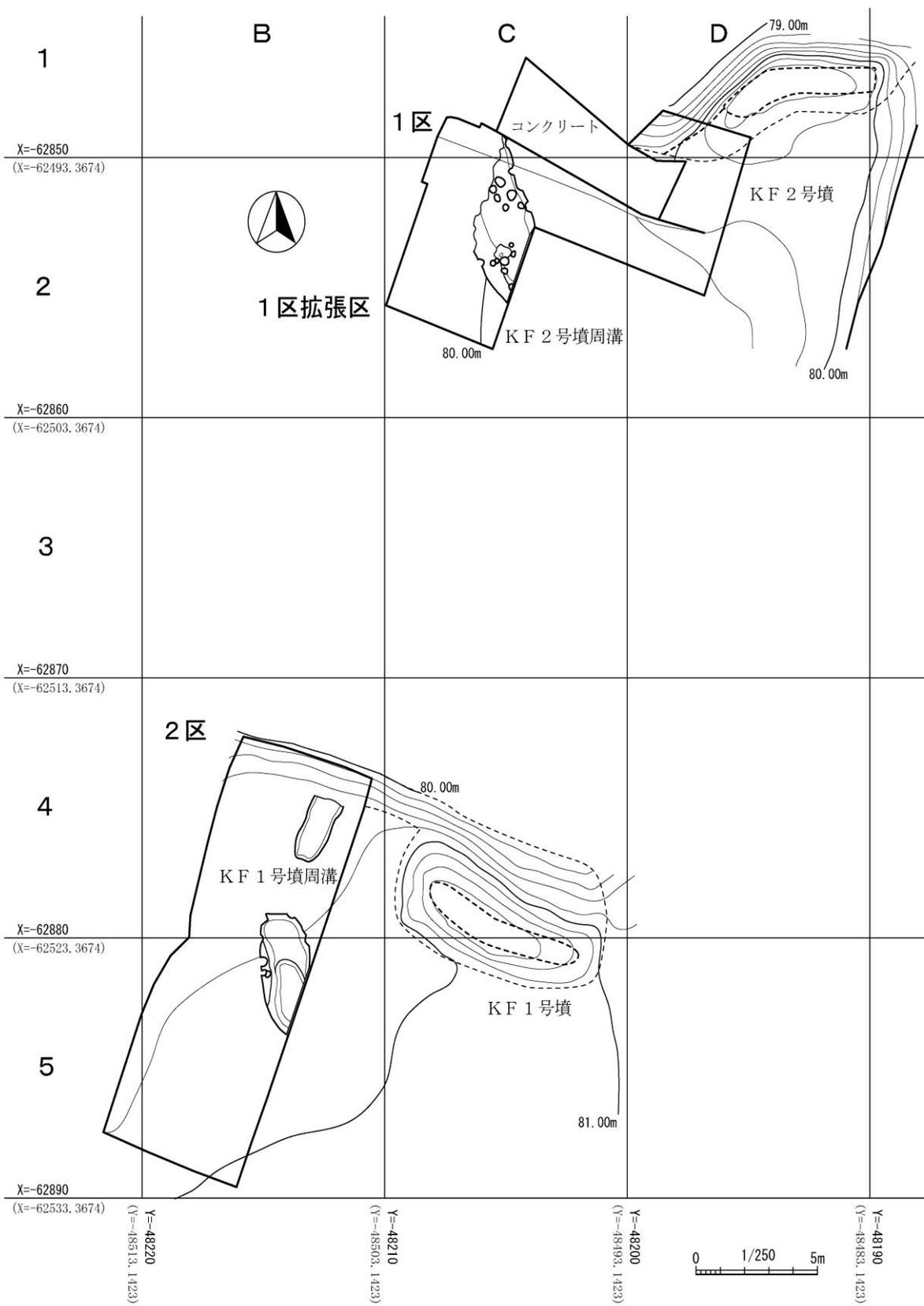


第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

調査の結果、南側の高まりの中心から西に約7mの位置と、北側の高まりの中心から南西に約12mの位置に、幅約2～2.7m程の溝が検出されました。また、北側の高まりの周辺から副葬品と見られる銅芯銀張りの耳環1点が出土したことや、覆土の特徴などからこれら2箇所の遺構は古墳時代後期の古墳であることが判明し、南側の遺構をKF1号墳、北側の遺構をKF2号墳と命名しました。検出された遺構・遺物としてはこの2基の古墳が今回の主要な成果となり、他に近世の耕作に伴う遺構や、縄文時代～弥生時代にかけての少量の遺物も発見されています。

まとめ 伊勢原市No.15の広がる農地一帯には、古墳および古墳状の高まりが多数存在しています。その中で主体部が調査された事例としては、日向・渋田遺跡、日向・西新田原遺跡があり、また行政区画では厚木市に属しますが実質的に同一遺跡とみられる七沢・実蒔原古墳群でも主体部と周溝の一部が調査されています。これらはすべて横穴式石室を持つ内径10～15m程の規模の円墳で、築造時期は概ね7世紀代と考えられています。今回の調査では主体部の調査は行われませんでした。自然石の露出する高まりと検出された周溝との関係から周辺の調査事例との類似がみられます。規模はKF1号墳は約15m、KF2号墳は約25m程と推定されます。

このように本遺跡の所在する一帯は未発見のものも含め、大規模な後期古墳群を形成しているものと思われませんが、その反面、同時期の集落遺跡はこれまでのところ発見されていません。古墳群の分布は南方の上粕屋付近、北方の厚木市七沢付近にも広がっており、さらにこの地域を取り巻くように、日向薬師、延喜式内社の大山阿夫利神社、三ノ宮比々多神社、下糟屋高部屋神社など古代の創建とされる寺院・神社があります。これは当地一帯がかつて周辺地域の聖地としての性格をおびていたことの証左と考えられるでしょう。(横山太郎)



第2図 KF 1・2号墳 (1/250)

中世のやぐら1基を調査

どくおんじ

独園寺やぐら群 第3次調査

所在地 横須賀市浦郷町三丁目49-2

調査期間 2015年11月17日～12月7日

調査面積 19m²

調査組織 株式会社 玉川文化財研究所

担当者 河合英夫・小池 聡

調査概要 本調査は急傾斜地崩壊対策工事に伴う独園寺やぐら群（横須賀市No.147）の第3次発掘調査です。調査地点の東側には遺跡名の由来となった独園寺が所在します。

本市の主要部は、標高100～200m内外の起伏の多い丘陵や山地からなっていますが、

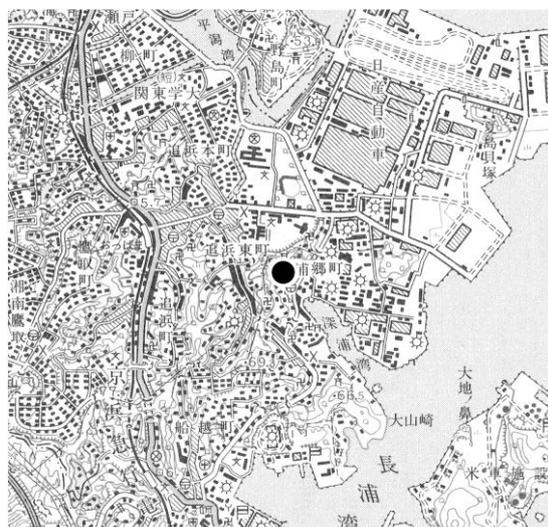
やぐら群の位置する横須賀市浦郷町周辺は、岬と入江とが複雑に入り込んだリアス式の地形が特徴です。本やぐら群は、海岸部に近い南西ないし南に開口する谷戸の丘陵崖面に形成された「やぐら群」で、5箇所の地点が周知されています。また、本やぐらは独園寺やぐら群B支群2号やぐらと命名し、この西側にはかながわ考古学財団が調査した1号やぐら、さらにその北西側には第1次のA支群1・2号やぐらの調査区が位置します。

発見遺構 中世の遺構はB支群2号やぐらの1基です。やぐら廃絶後、その前面を大きく掘削して造られたのが平場遺構や土坑と溝です。明確な掘削経緯や時期は不明ですが、土坑内や平場出土の陶磁器片などから近世後期以降、近代まで利用された施設と考えられます。

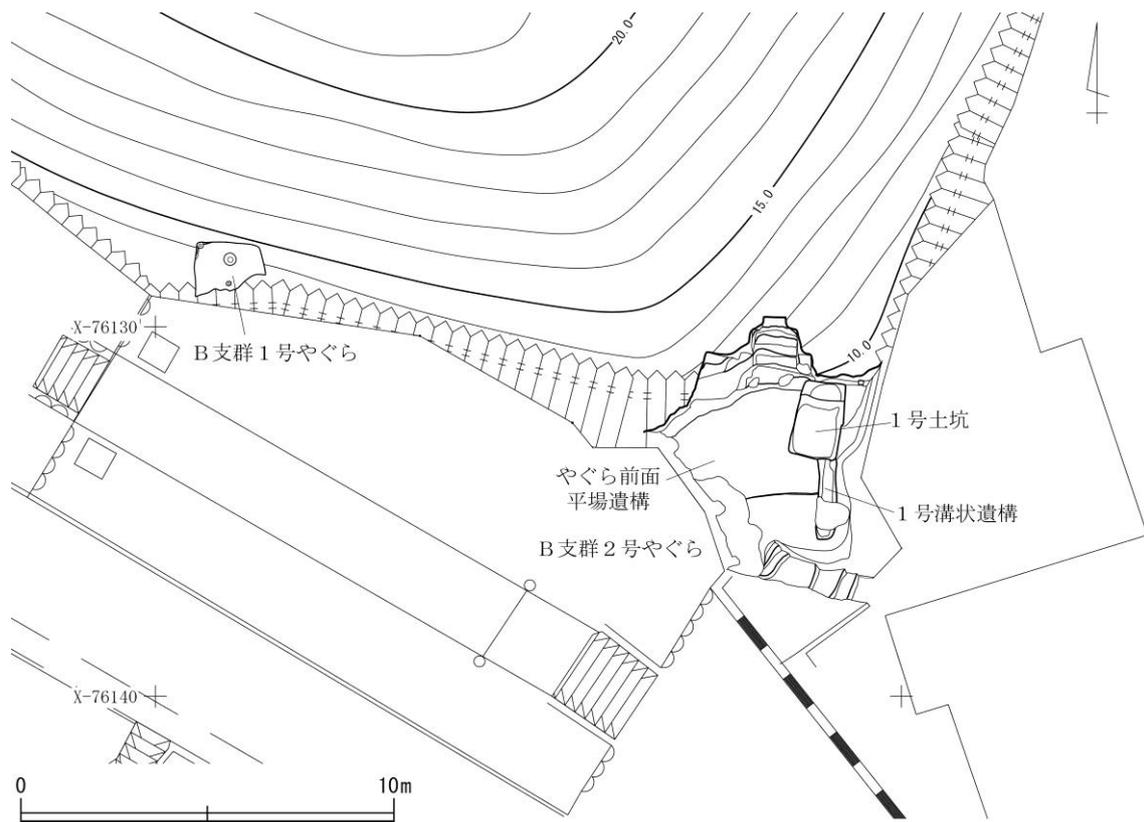
近世以降 平場遺構は、北壁側で6.6m、南端側で3.2m、奥行で4.4mで、南側に傾斜しています。北壁中央にはやぐらに向かって階段が設けられ、南側には境内とを上り下りできる階段があります。平場の形成時には、その東縁に土坑と溝が掘られ、両者は一体として機能した施設と考えられます。

中世 本やぐらとその前面は平場遺構の形成に伴い近世以降に大きく改変されたと推定されます。その結果、やぐらは玄室奥壁部分と天井部の一部、それに東壁側の一部が残存しているのみで、やぐらに関わる施設の大半は失われたと考えられます。奥壁部は幅・高さとも1.2mと推定され、玄室奥壁の中央部上半には一辺60cm四方で、奥行25cmほどの方形施設があり、^{かん}龕と推定されます。この部分には鑿による細かい調整痕がみられました。遺物は確認できませんでしたが、平場遺構の調査時に出土した摩耗の著しい五輪塔の空風輪は本やぐらに伴うものと考えられます。

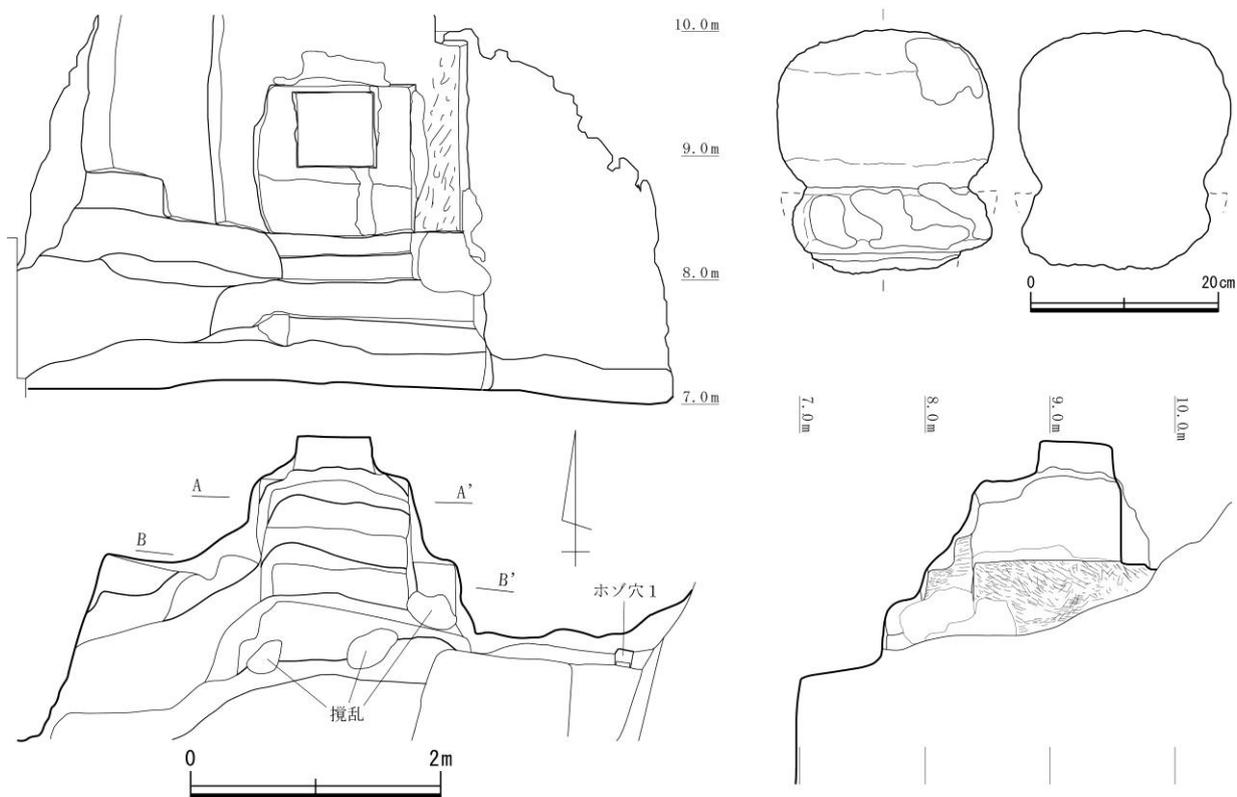
やぐら群の評価 本やぐらを含む当地に造営されたやぐら群は中世後半には本来の機能は失われ、近世以降の改変により龕周辺のみが辛うじて残るような状態でした。しかし、この場所は独園寺が造営されると、その跡地は新たな信仰の場所として維持されてきたと思われれます。その結果として、やぐらの前面には階段が設けられ、龕の部分は祭壇として利用されたと考えられます。明治期以降、この平場は「針供養」の場として使われてきたこともそれを裏付けるものでしょう。（河合英夫）



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 独園寺やぐらB支群全体図 [1/200]



第3図 B支群2号やぐらおよび前面平場遺構階段施設 [1/60]

中世～近世の井戸址と地下式坑を発見

よう だ おお ごと ち

用田大河内遺跡

所在地 藤沢市用田 1501（1 地点）、
1504-1（2 地点）、1496-2（3 地点）

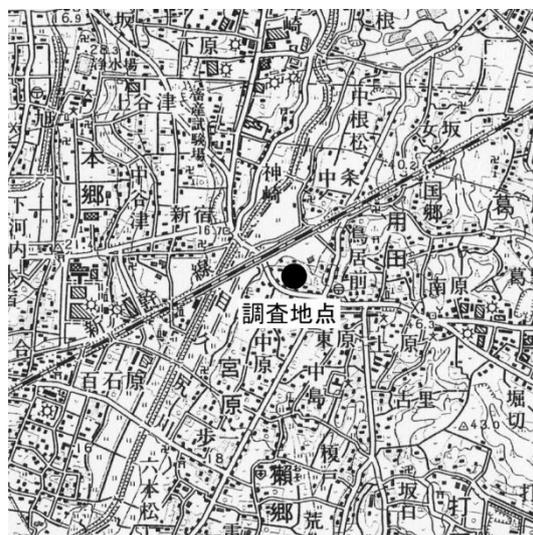
調査期間 2015 年 11 月 25 日～3 月 11 日

調査面積 157 m²

調査組織 株式会社 玉川文化財研究所

担当者 吉田浩明・太田雅晃

調査概要 神奈川県藤沢土木事務所による県道 22 号（横浜伊勢原）道路改良工事に伴い調査を行いました。本地点は相模野台地の中でも目久尻川中流域東側 400m の台地縁辺部にあり、調査地点は 1～3 地点に分かれています。標高は 18.4～20.9 m を測ります。一帯は用田大河内遺跡・用田鳥居前遺跡・用田南原遺跡・葛原下滝谷戸遺跡・葛原滝谷遺跡を対象として用田バイパス関連遺跡群の調査が行われていますが、今回はその第 8 次調査にあたります。検出した遺構は中世・近世が主体で、出土遺物は 15～16 世紀のものが中心となっています。



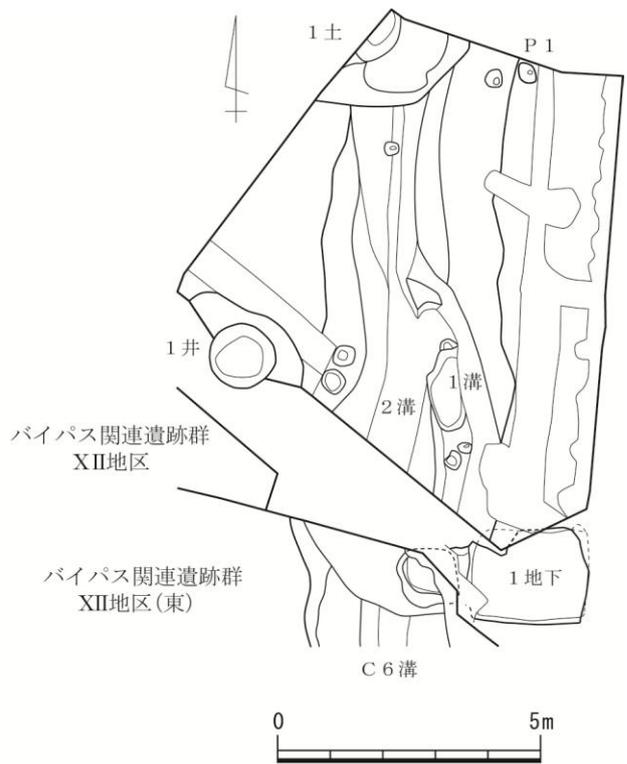
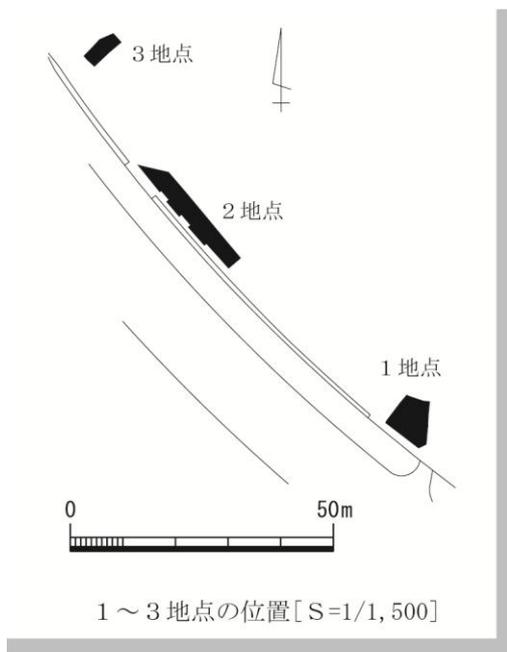
第 1 図 遺跡位置図 (1/50,000)

1 地点 中世・近世の地下式坑 1 基、井戸址 1 基、土坑 1 基、溝状遺構 2 条、ピット 1 基、および縄文時代のピット 1 基を検出しました。1 号土坑からは 15 世紀前葉の常滑産の焼締陶器甕が出土しました。1・2 号溝状遺構は重複して同一方向に延びており、1 号溝からは 15 世紀代の土器（捏鉢）や常滑産の焼締陶器甕、2 号溝からは 15 世紀後葉から 16 世紀前葉と考えられる天目碗が出土しました。古いものとしては、遺構外から 13 世紀中頃の常滑産の焼締陶器甕が出土しています。

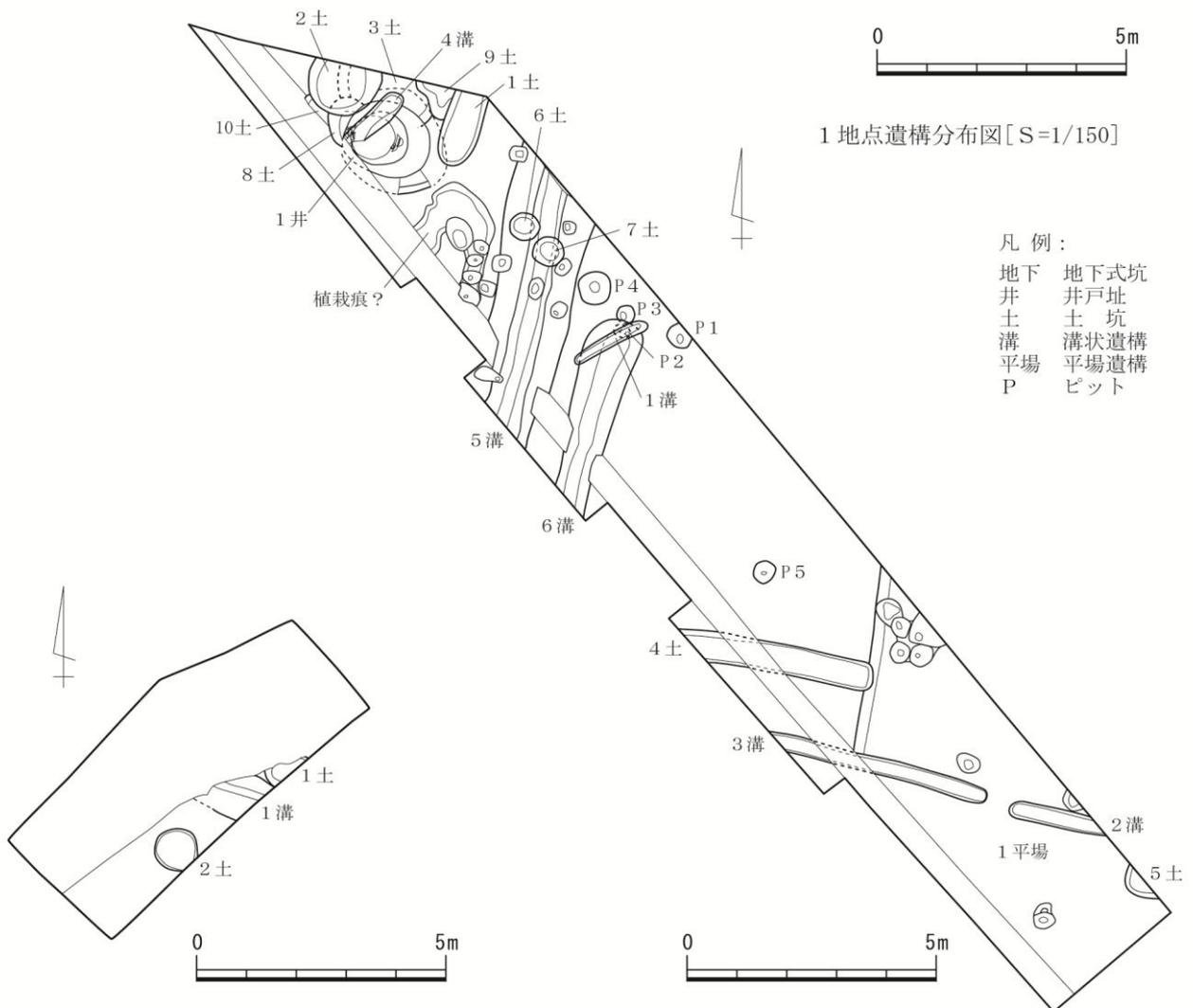
2 地点 中世・近世の井戸址 1 基、土坑 10 基、溝状遺構 6 条、平場遺構 1 カ所、ピット 5 基、および古墳～平安時代のピット 20 基を検出しました。井戸址は深さ 4.6m で井戸底を確認し、かわらけの細片 1 点が出土しました。土坑は円形を基本とするものとイモ穴のような細長い長方形のものに分かれます。溝は幅が狭く細長いものと断面 V 字形のものがあります。1 号平場遺構からは 15 世紀末から 16 世紀初頭と見られる陶器の挟み皿が出土しました。

3 地点 近世の溝状遺構 1 条、および古墳～平安時代の土坑 2 基を検出しました。溝状遺構の覆土中には 1707 年（宝永 4 年）降下の宝永火山灰が混じるため、1707 年以降の埋没が考えられます。

まとめ 隣接する用田バイパス関連遺跡群の調査では、区画溝に伴って掘立柱建物址、竪穴状遺構、地下式坑、井戸址、段切り遺構、土坑が多数検出されており、一帯は中世から近世にかけての屋敷地や耕作地として利用されたことが分かっていました。今回の調査でも、地下式坑、井戸址、土坑、溝状遺構など同種の遺構を検出し、用田バイパス関連遺跡群の地下式坑や溝状遺構が今回の 1～3 地点に延びることも確認できました。こうした点は、これまでの調査成果を追認できる結果となりました。（吉田浩明）



1 地点遺構分布図 [S=1/150]



- 凡 例 :
- 地下 地下式坑
 - 井 井戸址
 - 土 土 坑
 - 溝 溝状遺構
 - 平場 平場遺構
 - P ビット

3 地点遺構分布図 [S=1/150]

2 地点遺構分布図 [S=1/150]

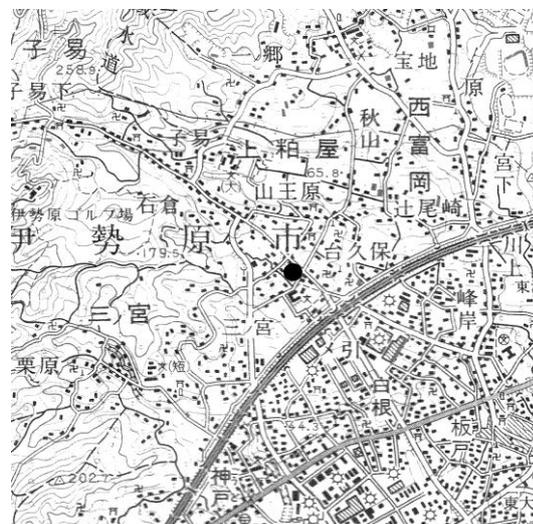
第2図 1~3地点位置図および遺構分布図 [1/1, 500、1/150]

縄文時代の陥し穴を発見

かみかすや とりいざき

上粕屋・鳥居崎遺跡第3次調査

所在地 伊勢原市上粕屋地内
調査期間 2016年3月8日～4月15日
調査面積 75.2 m²
調査組織 株式会社 玉川文化財研究所
担当者 北平朗久・小森明美
調査概要 本調査は、県道 611 号（大山板戸）交通安全施設等整備工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査として実施され、3面の遺構検出面が確認されました。1面からは近世、2面からは平安時代、3面からは縄文時代の遺構が検出されました。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

近世 土坑1基が検出され、遺物は出土し

ていませんが、覆土上層に宝永火山灰が観察されたことから、降灰時の宝永4（1707）年には大半が埋没していたと考えられます。遺物は、遺構検出面から常滑産と推定される焼締陶器甕の胴部破片が1点出土しました。また、本遺跡周辺は文政8（1825）年の「上粕屋郷絵図」には田畑と記載されており、第1～3次調査を含めても近世の遺構はピット4基、土坑1基と少ないことから、本遺跡周辺は耕作地に利用されていたと推定されます。

平安時代 ピット69基が検出されました。遺物が出土していないことから詳細な時期は不明ですが、ピットの検出面（第2面）と黒色スコリアを多く含む覆土の特徴から平安時代の遺構と推定しました。隣接地の第1・2次調査で平安時代の遺構とされたピット・土坑と今次調査で発見されたピットは、同一面で検出され、覆土の特徴も類似することから、同時期に属するものと考えられます。今次調査のピットは調査区のほぼ全体に分布し、平面形は楕円形が主体で、規模は長軸で50 cm前後のものが多く検出されています。また、今次調査のピットの中には長軸で140 cm前後、深さ22～45 cmを測る大形で、掘立柱建物の可能性をもつ溝もち形状のピットが3基含まれていますが、調査区が狭いことから詳細は不明です。

縄文時代 陥し穴1基が検出され、平面形は隅丸長方形、規模は長軸111 cm、短軸63 cm、深さ77 cmを測り、底面にピット1基を有します。遺物が出土していないことから詳細な時期は不明ですが、縄文時代早期～前期に比定される富士黒色土層下層に掘り込まれていることや、同中期に比定される富士黒色土層の中層が陥し穴の上面に堆積していることを踏まえると、おおそ早期から前期の時間幅に収まるものと考えられます。本遺跡での明確な縄文時代の遺構・遺物の検出例はなく、今次調査で発見された陥し穴が唯一の遺構です。第1～3次までを含めた調査成果からは、調査地点周辺の縄文時代の遺構密度は希薄と考えられます。（北平朗久・小森明美）

煤ヶ谷古在家遺跡第2地点

所在地 愛甲郡清川村字古在家地内

調査期間 平成27年6月5日～8月25日

調査面積 60.0 m²

調査組織 株式会社 玉川文化財研究所

担当者 香川達郎・西野吉論

調査概要 遺跡は丹沢山地東麓と中津山地に挟まれた溪谷内にあり、厚木市の平野部に向け流下する小鮎川が形成した標高153mほどの河岸段丘上に立地しています。遺跡では今回調査区の北西側隣接地で平成26年度に第1回目の調査が行われています。今回は中世・近世で各1面の遺構面と縄文時代遺物包含層の調査に当

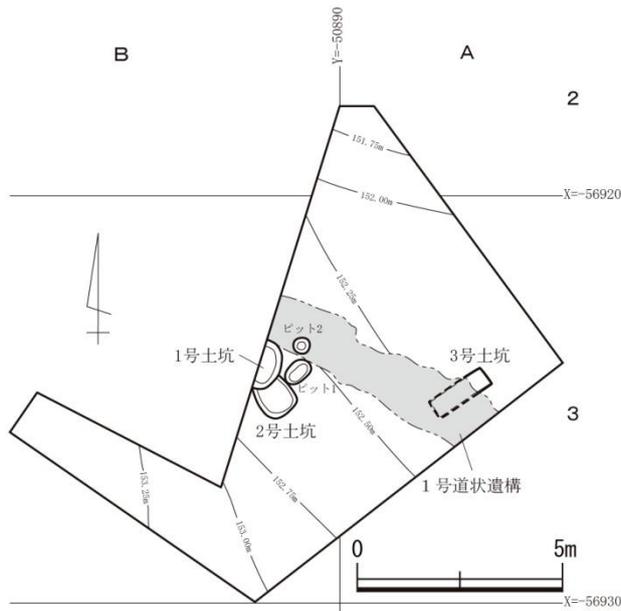


第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

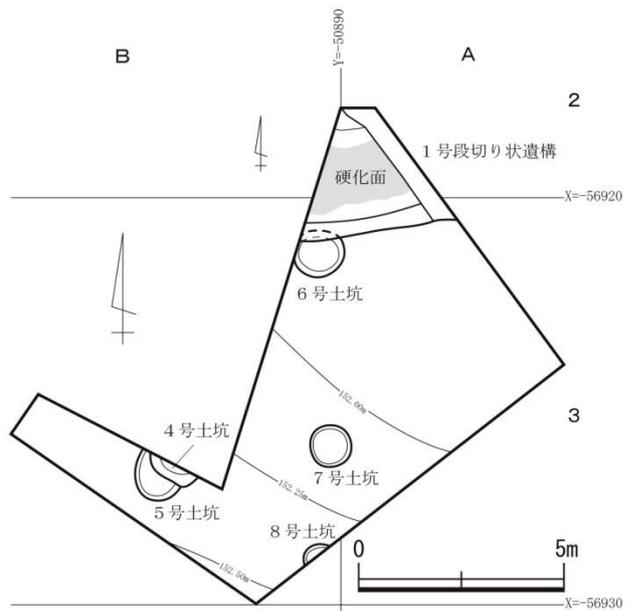
たりました。まず、最上位の第1面は地表下50cmで検出し、道状遺構1条、土坑3基、ピット（小穴）2基を発見しました。このうち道状遺構は前回調査で発見された同一遺構の南東側延長部に当たり、両地点を合わせた長さは約20.0mを測ります。道は1.0～1.5mの幅をもち、谷筋（北西～南東方向）に沿ってさらに南東側調査区外に延びていました。また、土坑とピットは道状遺構の脇ないし路面上に掘り込まれていました。遺物は全く出土しませんでした。遺構が掘り込まれている土層から中世の遺物が出土していることや、前回調査では遺構を覆う土層に宝永火山灰（1707年降下）が含まれていたことから、18世紀初頭以前の近世に構築されたものと判断されました。

第2面は、第1面より40cm下位で検出しました。発見遺構は、斜面を切り土して平坦面を造り出した段切り状遺構1ヶ所と、この段切りの際に沿って延びる道が1条、そして「円形土坑」と呼ばれる土坑が5基です。なお、遺構確認面上には整地を行った跡とみられる規則的に並んだ掘削痕が多数検出されました。これらの発見遺構からは遺物が全く出土しなかったため時期認定の材料に乏しいですが、遺構面を覆っている土層からは、13世紀後半代と類推される常滑産片口鉢や15世紀末～16世紀初頭頃の瀬戸・美濃産の挟み皿、1038年以降の流通年代が考えられる銭貨（皇宋通寶）など、少ないながらも遺物が出土したことから、中世の遺構と類推できました。

第2面の遺構が掘り込まれている土層は、粒子の粗い黄褐色土が堆積しており、層中からは縄文時代晩期前葉の安行3a式に属する深鉢形土器が1個体分出土しました。丹沢山塊では同時期の土器出土例は極めて少ないことから、大きな成果となりました。遺物はその他に後期あるいは晩期に属する2点の土器と打製石斧が1点出土しました。なお、前回調査では早期後葉ごろに位置付けられる陥し穴が5基検出されており、この成果を踏まえて地表下3.0mまで調査を行いました。遺構は発見されませんでした。（香川達郎）



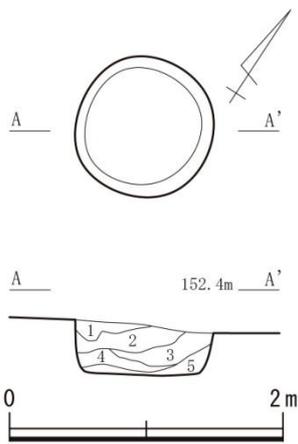
第2図 中・近世第1面 [1/200]



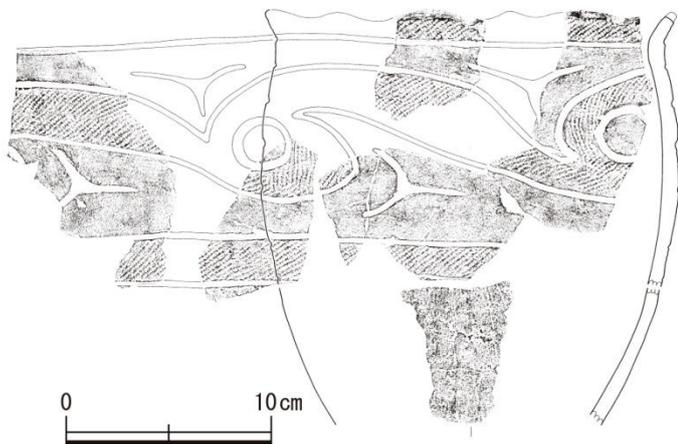
第3図 中・近世第2面 [1/200]



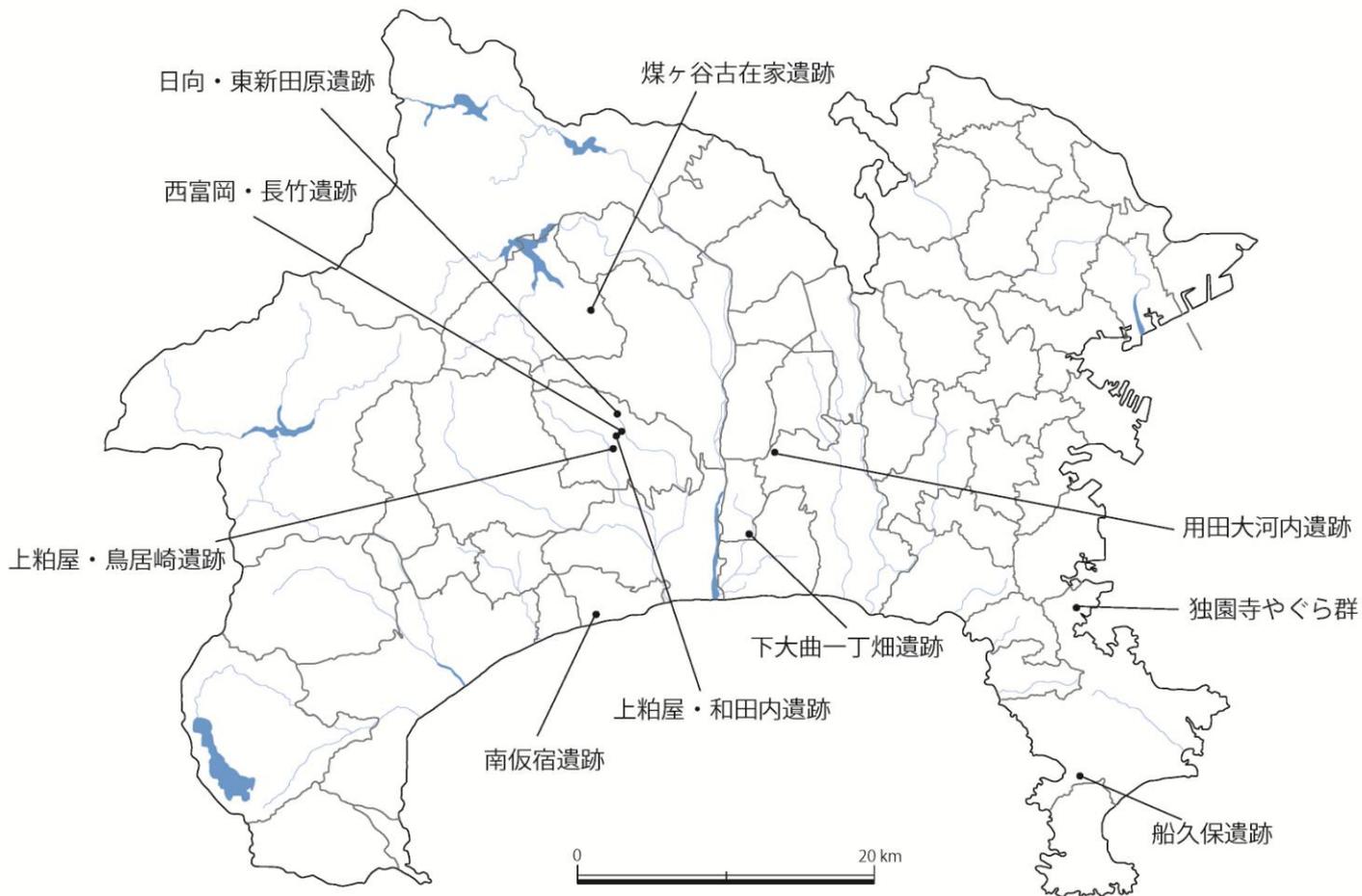
写真1 中・近世(第2面)全景



第4図 第2面 7号土坑 [1/60]



第5図 第3面 遺構外出土縄文土器 [1/4]



今回発表の遺跡

神奈川県発掘調査成果発表会は、神奈川県が行う事業に伴って実施された発掘調査の最新の成果を一般の方々に公開し、埋蔵文化財への理解を深めていただくことを目的としています。

平成 28 年度 第 3 回考古学講座
神奈川県発掘調査成果発表会 2016

発行日 平成 28 (2016) 年 7 月 30 日

編集・発行 神奈川県教育委員会 教育局 生涯学習部 文化遺産課

中村町駐在事務所 (神奈川県埋蔵文化財センター)

〒232-0033 神奈川県横浜市南区中村町 3-191-1

TEL 045-252-8661

FAX 045-252-8663